

主催 邦楽連合会

社団法人 義太夫協会

中央区銀座六の十八の二演舞場B二
電話(五四二)五四七一番

清元協会

港区西麻布一の二の三の四〇五
電話(四〇五)八〇〇五番

財団法人 古曲会

中央区銀座八ノ六ノ三 新橋会館
電話(五七二)〇二一六番

新内協

品川区旗の台六の二七の二
電話(七八一)三九五番

常磐津協会

目黒区上目黒四の三十三の十四
電話(七二五)一五一八番

社団法人 長唄協会

中央区銀座二の十一の十九の四
電話(五四二)六五六四番

社団法人 日本三曲協会

港区赤坂二の十五の十二の四〇三
電話(五八五)九九一六番

(五十音順)

後援 東京都

昭和六十二年三月八日(日)

第一生命ホール

第一部 十二時半開演

四時終演

第二部 四時半開演

八時終演

'87 都民芸術フェスティバル

第十七回

邦楽演奏会

— 邦楽名曲選 —

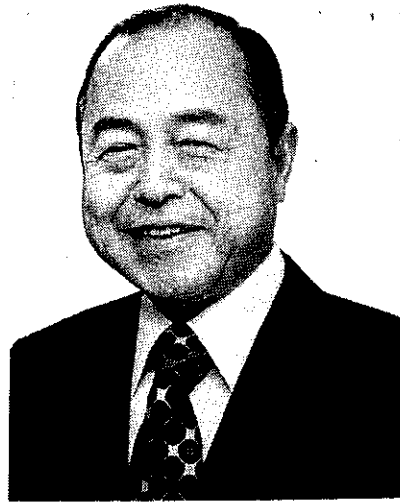
'87都民芸術フェスティバル参加公演 (昭和61年度東京都助成公演)

分野	種目	団体名	演 目	公演数	期 日・会 場	入 場 料 金	問 合 せ 先
音	オペラ	(株)日本演劇協会	G・ブッチーニ「トスカ」 (二期会オペラ振興会)	3	1月23～25日 東京文化会館	円 8,000～1,500	(株)二期会オペラ振興会 (370)6441
			D・ニゼット「ルチア」 (財)日本オペラ振興会)	3	2月6日～11日 東京文化会館	8,000～1,500	(株)日本オペラ振興会 (369)7020
			G・ヴェルディ「リゴレット」 東京オペラ・プロデュース	2	3月17日・18日 東京文化会館	8,000～1,500	東京オペラ・プロデュース (363)5120
	室内楽	オーケストラ	5	1月7日～3月15日 東京文化会館	2,200～1,000	(社)日本演奏連盟 (437)6837	
邦楽	邦楽	邦楽連合会	第18回 都民のための コンサート	2	2月14日・19日 東京文化会館	2,000	
			デュク・エイセス カーニバルコンサート	1	2月27日 よみうりホール	2,500	デュク・エイセス後援会 事務所 (405)6631
演	新劇	新劇団協議会	W・ギブソン 「奇蹟の人」	7	2月2日～10日 よみうりホール	定時制高校生招待有	新劇団協議会 (341)8151
			チューホフ 「かもめ」	22	2月28日～3月21日 青山円形劇場	3,000	
			山崎正和 「世阿彌」	23	3月5日～3月22日 サンシャイン劇場	5,000～3,000	
劇	児童劇	日本児童演劇団協議会	影絵劇合同公演 「チロメップのきつね」他2本	7	2月11日～3月23日 調布市市民福祉会館他5会場	当日 2,000 前売 1,500	日本児童演劇団協議会 (409)1797
			舞台劇合同公演 「フロドの冒険」	20	3月6日～29日 スタジオR他3会場	当日 2,000 前売 1,800	
			人形劇合同公演 「関八州駿馬」	3	3月17日～19日 安田生命ホール	当日 2,300 前売 2,000	
舞	バレエ	(株)日本バレエ協会	「ジゼル」	3	3月4日～6日 東京文化会館	5,000～1,500	(株)日本バレエ協会 (462)5524
			「白鳥の湖」	2	1月10日・11日 東京文化会館	5,000～1,500	東京シティ・バレエ団 0424(85)2915
踊	現代舞踊	(株)現代舞踊協会	「シューズ」 「最後の7日間」 「椿姫」	2	2月18日・19日 東京文化会館	3,000～2,000	(株)現代舞踊協会 (400)4544
			日本舞踊	第30回 日本舞踊協会公演	6	2月5日～7日 国立劇場	5,000 (無料招待あり)
古典芸能	能	(株)能楽協会	都民能	1	1月17日 国立能楽堂	2,500	(社)能楽協会 (574)6441
			翁付式能	1	2月15日 国立能楽堂	5,000	
	民俗芸能	第18回 東京都民俗芸能大会	2	3月1日 中央区立中央会館 3月7日 五日市町民会館	無料招待	東京都民俗芸能大会実行委員会事務局 (394)5923(松本)04822(9)17(1)5(2)	
寄席芸能	第17回 都民寄席	7	2月6日～3月14日 東村山市中央公民館他6会場	無料招待	都民寄席実行委員会事務局 0423(81)5534		
4分野	12種目	11団体		120公演	40会場		

◎これらの個々の公演の詳細についてのお問合せは、各団体に、助成公演全般についてのお問合せは、東京都教育庁社会教育部文化課(電話 212-5111 内線 44-531, 44-532)へお願いいたします。

'87都民芸術フェスティバルに寄せて

東京都知事 鈴木俊一



都民芸術フェスティバルのシーズンがまたやってまいりました。この催しのキャッチフレーズは、**「すぐれた芸術を、心ゆたかな、くらしの中へ」**です。東京都が芸術文化団体の公演を助成することによって、都民の皆様が優れた舞台芸術を鑑賞していただくというねらいで始めたもので、今回で十九回目を迎えます。

日頃の鍛錬にさらに磨きを加え、最高の舞台芸術を提供しようという出演者の方々のなみなならぬ意欲と都民の皆様の熱い声援に支えられ、東京の新春を彩る代表的文化行事としてすっかり定着してまいりました。誠に嬉しい限りです。

私はいま、マイタウン東京構想の早期実現に向け第二次長期計画を策定し、その歩みをいっそう進めようとしています。物が豊かになり、生活が便利になるにつれ、心のゆとりや人と人とのふれあいを求め、そしてわがまち東京の歴史や文化に改めて関心が高まりつつある中において、東京都は、都民芸術フェスティバルを他の文化的施策とともに、今後ともこれら都民の要望と期待に十分応え得るものとし、国際的にも誇れる催しとして一層充実、発展させてまいりたいと考えております。

一人でも多くの都民の皆様が、優れた舞台芸術を心ゆくまで堪能されますよう願ってやみません。また、このフェスティバルに参加し、東京都の芸術文化の振興にお力添えくださいました邦楽連合会の力一杯のご活躍を心からご期待申し上げます。

第一部 番組 (十二時半開演)

一、三曲八重衣

三弦	米川文勝之	尺八	デヴィッド・ウイラー
同	五月女文紀	同	静隠ローリー・カザス
同	フレイヴィン雅志		
箏	五月女文勝於		
同	斎藤文香代妃		
同	ネルソン文勝豪		

二、常磐津積恋雪関扉 (関の扉) 下

浄瑠璃	常磐津文字太夫	三味線	常磐津菊助
同	常磐津小文字太夫	同	常磐津東蔵
同	常磐津八重太夫	上調子	常磐津絃寿郎
同	常磐津和光太夫		

三、一中節邯鄲

浄瑠璃	宇治文彩	三味線	宇治文好
同	宇治文美子	同	宇治文蝶
同	宇治紫松		

四、新内明烏夢泡雪 (明烏) | 雪責め |

浄瑠璃	富士松長門太夫	三味線	新内勝次朗
同	新内勝英太夫	上調子	新内勝次朗

五、義太夫伽羅先代萩——政岡忠義の段——

浄瑠璃 竹本 土佐廣
三味線 鶴澤 寛八

六、清元六歌仙容彩——喜撰——

同	同	同	浄瑠璃
清元	清元	清元	清元
梅惠寿	梅美秋	梅多寿	紫寿文
	上調子	同	三味線
	清元	清元	清元
	香葉	益代	梅丸

七、長唄網館の段

同	同	同	唄
東音	東音	東音	東音
宮川	西垣	福田	西垣
尚	和	克	勇
久	彦	也	蔵
同	同	同	三味線
東音	東音	東音	東音
村尾	小島	後藤	菊岡
慎	直	敏	裕
三	文	之	晃

離子

太鼓	大鼓	立鼓	脇鼓	笛
藤舎	望月	堅田	望月	福原
呂雪	左吉	喜三	太喜	百之助

歌詞と解説 (演奏順)

(解説 竹内道敬)

第一部

一、三曲八重衣

石川勾当の作曲で、俗に「石川の三つ物」の一つ。(他の二つは「融」と「新青柳」)。

「百人一首」の中から「衣」という言葉の含まれた和歌五首を四季の順に並べ、最後の歌の下の句だけを繰り返したものが。手事は三首目の後と、五首目の上の句の後と二回ある。前の手事は、手事、中チラシ、手事、本チラシ、後の手事は、手事、後チラシという構造である。前の手事は「衣うつなり」にちなんで「砧」を描写しており、後の手事は虫の音を描写している。

君がため、春の野に出て若菜摘む、わが衣手に雪は降りつつ。

春過ぎて、夏来にけらし白妙の、衣干すてふ天の香具山。

みよし野の、山の秋風小夜ふけて、故郷寒く衣うつなり。

(手事)

秋の田の、かりほの庵の苫をあらみ、わが衣手は露に濡れつつ。

きりぎりす、鳴くや霜夜の狭庭に、

(手事)

衣かたしき独りかも寝ん、衣かたしき独りかも寝ん。

二、常磐津積恋雪関扉(関の扉)下

天明四年(一七八四)十一月、江戸桐座の顔見世狂言「重人重小町桜」(じゅうにひとえ・こまちざくら)の大切浄瑠璃として初演された。作者は劇神仙こと宝田寿葉。作曲者は当時の豊後節の作曲の名人鳥羽屋里長と推定されている。逢坂山の関を守る良岑宗貞の下で、天下を望む大伴黒主が関守関兵衛となつて忍んでいる。宗貞とかねて恋仲だった小町姫が尋ねて来て、宗貞と再会、互いに悲しい恋の思い出に泣く。そして小町姫は関守関兵衛を怪しいと見て、味方に知らせに行く。

以上が上の巻で、今日は時間の都合で下の巻のみの演奏。関兵衛が酔って出て宗貞にからみ、追い払うので、宗貞は心を残して奥へ入る。残った関兵衛が、天下調伏の護摩木にしようとして、雪中に花咲く墨染桜を伐ろうとする。と、宗貞の弟の安貞と契つた墨染桜の精が、傾城墨染となつてあらわれる。そして関兵衛を相手に廓話のあと、関兵衛の本性を現わし、立廻りになるという場面。

古い顔見世物の常として、内容は荒唐無稽なものであるが、それだけに大胆に筋を展開したおもしろさは、天明気分そのままである。まだ自然と人間の生活が密接だつた時代が感じられ、名曲としてたびたび上演され、今日に及んでいる。常磐津の作品中でも、もっとも大曲といわれるばかりでなく、浄瑠璃所作事の中でも一つの完成度を示す作で、筋の展開、スケールの大きさ、音楽的な構成など、あらゆる面で最高傑作といわれている。

今宵も既に降りしきる、雪の翼の羽風をも、音静やかにふけて行く。まさに先帝御亡き跡を、弔い奉る後夜の読経、なにおも回向を忘れもやらず、誦するも弟安貞と、心ばかりの手向草、宗貞袖を取り出し、おささりながら、血汐に染みしこの片袖、身に添え持たば先帝への恐れあ

り、いかげせんあたりを見回し、おおそれよそれよとくだんの片袖箆の下桶へ押し隠す、その間に奥の一間より、一杯機嫌で関守は、銚子盃たずさえて、足もひよろひよろ歩み出で、えい、世の中に酒ほどの楽しみはないわいの。やお前はまだ寝ないか、えいやなぜ寝なさらぬよ、してこの花嫁御はどこへ往た、はあ、きやつ床急ぎだな。ええ急ぐやつさ、これお前も往つて寝なよ、寝ぬのは損だばさらん、あれはさのえい、これはさのえいやと恋の測、もしもはまる気で四つ紅葉。なるほどわしは往つて寝ようが、そなたはきついでいようじや、ああ危ない、といさま入れる懐の、手先を押さえて、ああ、こりや何をするえ、俺が懐へ手を入れて、どうするのだ。さあこれは、いやさ、どうするのだよ、ええ聞えた、紙がないということか、神も末社も打ち連れて、めでたの若松様よ、枝も栄えて葉も茂る、おめでたや、千代の子おめでたや、千秋万歳、万歳、万々歳、はあ、いざいざせ給えと押しやられ、始終を胸に宗貞は、心残して奥へ入る。

跡は手酌の一人酒、あさぞ今頃は、しげれ松山、えいやえい気味だぞ、こりや命を掻きむしるわえ、どれももう一杯、酒に映ろう星の影。この盃中に鎮星の、きらめく影は真の一天、今月今宵三百年に余る、この桜を切つて護摩木となし、斑足太子の塚の神を祭る時は、大願成就心のまま、この斧をもってたちどころに、どれ、かしの石に斧の刃を、押し当て押し当て砥ぎ立つる、音はそうとうと、闇を照らせる金色は、玉散るばかり物凄き。(中略)

幻か深雪に積る桜影、げに朝には雲となり、巫山の昔目のあたり、墨染が立ち姿、二上りへ仇し仇なる名にしこそ立つれ、花のつぼみのいとけなき、禿立ちから廓の里へ、根こじて植えて春ごとに、盛りの色を山風が、来ては寝よとのかねごと、泊り定めぬ泡沫の、水に散りしく流れの身、関守は心付き、やあいずくともなく見馴れぬ女、この山蔭の関の扉へは、いつの間にとこから来たのだ、あいい私やあの撞木町から来やんした、むむ何しに来た、逢いたさに、そりや誰に、こなさんに、へなに俺に、そりやなせ、色になつて下さんせ、ええ、何がどうしたと、さあ、恥ずかしい事ながら、私や見ぬ恋にあこがれて、雪をもちとわすはるばると、ここまで来たほどにどうぞ色よい返事をし

て下さんせ、こりやありがたいたいだが、どうも合点がいかがわえ、ああ、お前もまあ疑い深い、そこが歌にもいえる、桜咲く、桜の山の桜花、へ咲く桜あり、散る桜あり、へ思い思いの人心じやわいなあ、へそう聞けばありそうな事、何にもせい、いま日の下に二人となし、器量なら風俗なら、ろこういわれぬ撞木町の太夫職が、色で逢おうとは、こりや大きに幸せが直つて来たわえ、そんならいよ、これからは、へいつまでも可愛いが、秀鶴の千代八千代、諸白髪まで添いとけて下さんせ、それは近頃かたじけない、時に太夫さん、お前のお名はえ、墨染といいやんす、へなに墨染、あの桜の名もとは墨染、へええ、へはて、えいお名にござりますの、それはともあれ、ついに俺はまあ、女郎買いをしたことがないが、廓の駆け引き、へ馴染みのしこなし、間夫狂い、実と、へ嘘との、へ手管の諸訳、へ裏茶屋入りの魂胆まで、へそんならここの、話をかえ。

ナゲツシへ行くも帰るも忍ぶの乱れ、限り知られぬわが思い、へ月夜も闇もこの廓へ、忍び頭巾で格子先、へ行きつ戻りつ立ちつくす。(中略) へ籠の内より小手招き、へふわと着せたる裾襦の、へ裾に隠れて長廊下、毒蛇の口を逃れし心地、ほっと一息つく鐘も、引け四つ過ぎて床の上、へや、まだこの暖まりの冷めぬのは、さつきに帰った客でもよもやあるまいが、こりや他に出来たわえ、どこのどいつか知らねども、お年が若うて良い男で、お金もたんと御所持なされた色男様と、しつぽりと御契りなされたござりましょうの、ええ腹が立つ、へほ、こりやおかしい、覚えないこといにかけて、口舌の種にさんすのかえ、へええ憎らしいと、ふつりつねれば、へあいた、あ痛いわい、こんなところによより、帰りましょ。(中略) へこれ、へ往のうやれ、わが故郷へ帰ろやれ、へ立ち舞ううちに落ちたる袖、これはと墨染取り上げて、抱き締めつ身に添えつ、床しき夫の形見やと、人目も恥じず泣きければ、へこれ、そなたは何を泣くのじや、へさあこれは、おそれそれ、この片袖は、よその女中さんから書いてよこさしやんした、起請じやの、へいそりや片袖だ、へいえい起請でござんしょう、へおおなるほど起請じや、へええお前はなあ、クドキ、へこれこのように初めから、起請誓紙を取り交し、深いお方があるながら、隠しておいてまたわしに、色で逢うとはようもまあ、瞞さんしたが憎らしい、へそうと

も知らず慕い来て、見ればかなや片袖の、血汐の文字は亡き跡の、形見と思えばいとどなほ、これ懐かしい悲しいと、言葉に色は含めども心の劍穂に表れ、立ち寄る女を、へはつたとねめつけ、最前よりこの片袖に、心をかくる怪しき女、様子を明かせなんと、へおこの片袖は夫の血汐、そのみならず、最前わが業通にて手に入れし、勘合の印を所持なすからは、様子があろう、本名あかせ、何とじゃ、へかくなる上は何をか包まん、われこそは中納言家持が嫡孫、天下を望む大伴の黒主とは、俺が事だわやい、へさてこそ、へわれに恨みをなさんとする、そもまず汝は何者じゃ、(中略)へわが本性の桜木を、邪険の斧にかかりしぞや、報いのほどを思い知れと、ありあう様を呵責の咎はつたと睨むありさまを、へやあこしやくなど無二無三、へ斧取り直してうちかかれど、凡人ならぬ精霊の、業通自在の身も軽く、ひらりひらひらひらひら、へ飛び交う姿は吹雪の桜、霞がくれや朧夜の、水の月影手にも取られず、へ見えみ見えみまたあらわされて、今ぞすなわち人界の、輪廻を離れ根に帰る、しるしを見よという声ばかり、形は消えて桜木に、春もかくやと帰り花、雪を踏み分け踏みしだき、水に戻れば墨染の、小町様と世にひろき、あまねく筆に書き残す。

三、一中節 都

都 (下の巻)

この曲はもと上下に分けて作曲された。原拠は能の「都都」で、上の巻は天保元年(一八三〇)七世十寸見河東の七回忌に追善浄瑠璃として(実は取り越して早い)、河東節で作曲された。そして今日演奏される下の巻は天保十二年十一月に、同じく七世十寸見河東の十七回忌の追善浄瑠璃として、河東節と一中節の掛合曲に作られ、これで上下が揃った。一つの曲がこのように長い間かかって完成したというのは、三味線

音楽ではきわめて珍らしい。
〔上の巻〕蜀の国のかたほとりに住む盧生という者が、楚の国羊飛山に貴い知識の人がいると聞き、はるばる旅に出る。その途中邯鄲の里に着き、一夜の宿を借りる。そこは昔、仙人から邯鄲の枕を賜わったというところで、しばしの間その枕を借りてまどろむと、夢に勅使があらわれ、楚の国の帝の位を譲ると告げる。
〔下の巻〕楚の国の帝になって見ると、そこはまことにすばらしいところで、五十年の間の榮華はまたたく間に過ぎてしまふ。ところが、これが粟の飯の出来の間のことで、夢から覚めて見ればすべては元のままであった。盧生はこの人生を夢の世と悟り、そのまま故郷へ帰ったという。この下の巻は、ふつう河東節と掛合いで演奏されるが、今日のように一中節だけでも演奏される。そしてこの下の巻は五十年の榮華を語るので、華やかであり、喜ばれている。時間の都合で一部を省略いたします。

まされ候えや。(中略)
一下りへつらへ、人間のありさまを按ずるに、へ百年の歡樂も命終れば夢ぞかし、ナオスへ五十年の榮華にも、身のためにはこれ迄なれ、へ榮華の望みも、齡の長さも、へ五十年の歡樂も、王位になれば、へこれまでもなり、へげに何事も一炊の夢、へ南無三宝、よくへ思えば、出離を求むる知識はこの枕なり、へげにありがたや邯鄲の、夢の世ぞと悟り得て、へ望み叶えて帰りけり。

四、新内節 明烏夢泡雪(雪責め)

初代鶴賀若狭権直伝で、「蘭蝶」「伊太八」とともに新内節の代表曲とされる作品。

明和六年(一七六九)七月三日、伊之助三芳野の心中事件がおきた。男は浅草藏前に住む幕府の御用商人伊藤伊右衛門の養子で二十一歳、女は新吉原京町二丁目萬屋の遊女で二十四歳だった。二人は前の年から馴染みを重ね、おさだまりの金につまり、男は勤当、女は他の客を断る、というので借金をはふえるばかり、結局二人は示し合せて廓を抜け出し、三河島田甫のあたりで心中した。

この事件をとり上げて脚色したのが初代鶴賀若狭権直で、ニユース性の強い浄瑠璃だったが、名曲なので今日まで語りつがれてきた。上下にわかれ、上は浦里部屋の場合、下がこの雪責めである。

黒塚、古木の松、そこに降る雪、そして赤い色の多い女の衣裳、と舞台も色彩あざやかな場面で、話が展開して行く、二階からきこえてくる唄は「昨日の花は今日の夢……」で、これはめりやす「いもせ川」の一部。「壇浦兜軍記」の阿古屋琴責めをうたったもので、当時流行していたものだろう。余所事に使った立体的な劇的效果をあげている。

へ不思議さよ、へありがたの景色やな、へもとより高き雲の上、月の光も明らけき、雲龍閣や阿房殿、げにも妙なるありさまの、へ庭には金銀の砂を敷き(中略)へいかに奏問申すべき事の候、御位に即き給いて早や五十年なり、しからばこの仙薬をきこし召さば、御年一千歳まで保ち給うべし、さるほどに、天の濃漿や沆瀣の盃、これまで持ちて参りたり。(中略)へ巡れや盃の、巡れや盃の、へ流れは菊水の、流に引かれて疾く過れば、手まず遮る菊衣の、へ花の袂を翻して、差すも引くも光なれや、へ盃の影の巡る空を久しき。(中略)
三下りへいつまでぞ、榮華の春も常磐にて、なお幾久し有明の、月人男の舞なれば、雲の羽袖を重ねつつ、欲びの歌をうたうよもすがら、日はまた出でて明らけくなりて、へ夜かと思えば、へ昼になり、へ昼かと思えば、へ月また牙やけし、へ春の花咲けば、へ紅葉も色濃く、へ夏かと思えば、へ雪も降りて、へ四季折々は目の前に、春夏秋冬の、万木千草も一日に花咲けり、面白や、不思議やな。(中略)
へいかに御旅人、粟の飯の出来て候、疾うへ御目を覚まされ候え、覚
へ浦里跡をうち眺め、涙に暮れていたりしが、
浦里「お情けあるお言葉なれど、これはかりはとも忘られぬ、お許しなされて下さんせ、まだこの上にとのような、悲しい苦しい責め苦でも、妾や厭やせぬ、どうなっても思い切られぬ、いっそ添われぬものならば、一緒に死にたい時次郎さん、殺して下んせ死にたいわいのう、三下りへ昨日の花は今日の夢、今はこの身につまされて、義理という字は是非もなや、勤めする身のままならず、別れとなれば今さらに、去なせともなき離れ際。
浦里「ええ、この苦しみに引き換えて、あの二階の三味線は、いつぞや主のいつづけに、寝巻のままに引き寄せて、互いに語る楽しみ、今宵は引き換え今頃は、どこにどうしていさんすやら、とにかく添われぬ二人が身の上、ああ味気なき浮世じゃなあ(中略)これみどり、さぞそなたは悲しかろ、妾が憎かる堪えてたも、思わぬ苦しみ堪忍しや、今宵に限りこの雪は、なんの報いぞぞ寒かろう、可愛いやのう。
みどり「いえ、私は寒うはござんせぬが、次郎さんはあのように、若衆に叩かれさんしたが、お前は悔しゅうござんしよう、私も悲しゅうてならぬわいのう。
浦里「おお、よういうてたもつた、そなたまでそのように、へ主を思うてたもつたもの、妾が心を推量しや、なんの因果にこのように、愛しいものかざりとは(中略)たとえこの身は泡雪と、ともに消ゆるも厭わぬが、この世の名残りに今一度、逢いたい見たいとしゃくりあげ、狂気の如く心も乱れ、涙の雨に雪とけて、前後正体なかりけり。
へ男はかねて用意の一腰、口にくわえて身を堅め、忍び忍んで屋根伝い、それと見るより悲しさの、伝えてたわむ松が枝も、今宵一夜の掛橋と、足もそぞろに定めなき。見るに浦里嬉しやと、悲しき怖さ危なさに、飛び立つばかりに思えども、身はいましめの葛蔓、降り積む雪に閉じられ

て、詮方なくもうぐいすの、ねぐら漂うばかりなり。

「難なく下へ降り立って、二人が縄を切り解き、時次郎「これ／＼浦里、ここで死ぬるは易けれど、逃るるだけは落ちて見ん、ついこの堀を越すばかり、幸いこれなる松の枝、伝うて行かんもろともと、

「互いに手早く身拵え、みどりも共にと取りすがる。可愛いやこの子はなんとせん、お心得たりとみどりを小脇に引き抱え、甲斐々々しくも時次郎、松の小枝を浦里に、しつかと持たせてあたりを見回し、忍び返しを引き外し、梯子となしてさし下し、よう／＼三人堀の上、下りんと思えど女の身、浦里は胸をすえ、死ぬると覚悟極めし身の上、なにか厭わんさあ一緒と、手を取り組んで一足飛び、げにもつともとうなずきて、互いに目を閉じ一思い、ひらりと飛ぶかと見し夢は、覚めて跡なき明鳥、後の噂や残るらん。

五、義太夫 伽羅 先代萩 政岡忠義の段

ふつう、義太夫節に作られたものを歌舞伎に移す場合が多いが、この題材は、歌舞伎の方がさきに脚色上演している。題材は万治・寛文(一六五八―一七二)ごろの仙台の伊達騒動で、歌舞伎は奈河亀輔作、安永六年(一七七七)四月大阪中の芝居で初演された。

義太夫は松貫四、高橋武兵衛、吉田角丸らの合作で、天明五年(一七八五)一月、江戸結城座で初演された。歌舞伎でも義太夫でも、俗に「飯焚き」といわれる御殿の場が、幼君鶴喜代を保護している政岡の苦勞を中心としているので、よく上演される。

ムムハハ、ムムハハ、ハハハハハ、オオ可哀そうに可哀そうに、痛い痛い、他人のわしさを涙がこぼれる、コレ政岡殿、現在のそなたの子、悲しゅうもないかいの。へなんのママ、お上へ対して慮外せし千松、御成敗はお家のため、へムム、すりやこれでもこなたはなんともないかや、これでもか、これでもか、へとなぶり殺しに、へ千松が苦しむ声の、へ肝先へこたゆる辛さ無念さを、じつとこらゆる辛抱は、ただ若君が大事ぞと、涙一滴目に持たぬ、男まさりの政岡が、忠義は先代末代まで、またあるまじき烈女の鑑、いまにその名はかんばしき。

へ榮は始終政岡がそぶりに気を付けうちほほえみ、へオオでかした八汐、右大将より鶴喜代へ下さる大切のお菓子、小倅めが出しやばって、すつてのことに大事の企み、いやあの大事の菓子を荒した科、殺したは八汐が働き、さすが渡会銀兵衛が妻ほどある。政岡には自らがいいきかすこともあり、沖の井、八汐両人は、暫く次へ間を隔て「遠慮召され」と榮の詞、何と違ふも沖の井が、深き心も和田津海の、汐の八汐も打連れ、伴い一間へ入りにける。後先見廻し榮御前、政岡が傍にすり寄って、「年ごろ仕込みしそなたの願望、成就してさぞ喜び」「エエ何とおっしゃる」「アアイヤ、モ隠すに及ばぬ。東西分ぬ内よりも、取替え置きしそなたの子の鶴喜代が身に恙のう、義綱の誠の倅千松がこの最後、さぞ本望であろうのう」「エエ」「オオ取り替へす子の様子は先立って知ったれども、もしやと思ひ最前から窺うて見るところ、血縁の子の苦しみを何ば気強い親々でも、耐えられるものじやない。若殿にしておくわが子が大事、そなたの顔色変らぬは、取替の子に相違はない、コリヤ皆心は同腹中、刑部殿とも内談し、諸事わが夫の差図あらん、まず今日は立帰り、病氣の様子申し上げん、必ず何事も、人に悟られまいぞや、へと一人のみこみ悠々と、館をさして帰らるる。

へ後には一人政岡が、奥口うかがい窺いて、わが子の死骸抱き上げ、こらえこらえし悲しさを、一度にわつと溜涙、せき入りせき上げ嘆きしが、へこれ千松、よう死んでくれた、でかしたな、でかしたな、でかしたな、そなたが命捨てたゆえ、邪智深い榮御前、取り替へす子と思ひちがえ、己が企みを打ち明けしは、親子の者が忠心を、神や仏もあわれみて、鶴喜代君の御武運を守らせ給うか、ハハハハハありがたや、ありがたや、これというのもこの母が、常々教えておいたこと、幼な心にききわけて

榮御前が頼朝公からの見舞といつて、毒入りの菓子を持つてくる。それを政岡の子の千松が取って食べ、菓子折を蹴散かし政岡は顔色一つかえないので、榮御前は若君と己が子とを取り替へたのだと思ひ込み、政岡に陰謀のことをうちあけて去る。政岡はそのあと、我が子千松の死骸をかき抱いて嘆き悲しむ。

へ襖押し開かせ梶原平三景時の奥方、夫の権威に榮御前、しとしとと座に直り、へオオどれどれ出迎い大儀、自ら今日来たりしは右大将の御上使、夫景時うけたまわれども、義綱の一人鶴喜代病氣によって男たる者を禁じたと聞きしゆえ、夫に代るこの榮、義綱隠居のその後、鶴喜代の所勞、ことに食事もすすまぬ由、御心をつけられしこの御菓子、頼朝公より下され物、ありがたく頂戴あれ、へと持たせし菓子箱、差し出だせは、へ八汐うけとり、へこれはこれにありがたい、大将より下され物、サアサア申し若君様、早う頂戴遊ばしませ、へと蓋押し開き、へてもまあ見事、結構なこのお菓子、いざ召しませ、へと差し出だす。へさすが童の嬉し氣に、立ち寄り給う鶴喜代君へアア申し御前様、またそのようなきもしいこと、御病氣の御身なればお毒になつたらなんとなさるる、こつちへお越し、へと政岡が詞、へ打ち消す榮御前、へヤア頼朝公より下さるお菓子、なに疑うて頂戴させぬ、せひこの榮が食べさせ、へアイヤそれでも、へムムただし頼朝公の仰せは背いても苦しゅうないか、へサア、へサア、へサア、へサアサアサア、へと権柄押し。

へ奥より走って千松が、へその菓子欲しい、へと引つ摺み、なんの頑是もただ一口、へ八汐がびつくり、へ榮御前、毒の企みのあらわれ口、へたちまち惱乱、目を見詰め、蹴散らかしたる折は散乱、八汐はすかさず千松が、首筋片手に引き寄せて、懐剣ぐつと突つ込めば、へわつと一声七転八倒、へおどろく沖の井、へ政岡が仰天ながら一大事と若君抱き、わが部屋へ押しやり参らせ、戸口に付き添い守りいる。

へやあ何をざわざわ騒ぐ事はないわいの、忝けなくも頼朝公より下さりしこの折、踏み破りしは上への無礼、小さい餓鬼でも、そのままにはさしおかれぬ、それゆえに手にかけたは、お家のおためを思う八汐が忠節

手詰になつた毒害を、よう試みてたもつたのう、よう試みてたもつたのう、そなたの命は出羽奥州五十四郡の一家中、所存の臍を固めさす、まことに國の礎ぞや。

へとはいふものの可愛やなあ、君の御為かねてより、覚悟は極めていながらも、せめて人らしい者の手にかかっても死ぬことか、素情賤しい銀兵衛が女房すれの刃にかかり、なぶり殺しを現在に、傍に見ている母が氣は、どのようにあろう、マどうあろう。思い廻せばこのほどから唄うた唄に、へ千松が七つ八つから金山へ、一年待てどもまだ見えぬ、二年までどもまだ見えぬ、へと唄の中なる千松は、待つ甲斐あつて父母に、顔をば見することもあろう、同じ名のつく千松の、そなたは百年待ったとて、千年万年待ったとて、なんの便りがあるぞいの、三千世界に子を持つた、親の心はみな一つ、子の可愛さに毒なもの、食べなというて叱るのに、毒と見えたら試みて、死んでくれいというやうな、胴欲非道な母親が、またと一人あるものか、武士の胤に生れたは、果報か因果かいじらしや、死ぬるを忠義ということは、いつの世からの習わしぞ、へと凝り固まりし鉄石心、さすがに女の愚に返り、人目なければ伏し転び、死骸にひしと抱きつき、前後不覚に嘆きしは、ことわりすぎで道理なり。

へ後にすつくと八汐の大声、「何もかも様子は聞いた。この方の巧みの妨げ女、己も生けては置かれぬ」と突込む懐剣、打落し直に切込む八汐が肩先、ひるむを取つて、突通され虚空を掴んでもがき死に、悪の報いはたちまちに心地よくこそ見えにけり。手柄々々と沖の井が、ともに喜ぶ千代八千代、竹に雀の葉をのして榮うる御代こそめでたけれ。

六、清元六歌仙容彩(喜撰)

天保二年(一八三一)三月江戸中村座初演。作詞は松本幸二、清元は二代目延寿太夫、齋兵衛らであった。

中村芝翫(四代目歌右衛門)が岩井兼三郎(六代目半四郎)

の小野小町を相手に六歌仙五段返ししの所作事であったが、このうち文屋と喜撰が清元、なかでもこの喜撰は清元と長唄のかけ合いで、今は別々にやるが、清元の方がよく演奏される。内容は、百人一首の歌で有名な喜撰法師が、ぐうとくだけて江戸の長屋住まい、吉原のことや当時流行のチヨボクレ、ヤアトコセなどで踊るといふ不思議なものだが、この曲ではそうした筋や理屈は別として、幕末の江戸の洒落た気分、清元のいきな気分、作曲のよさを味わうのが主である。

へわが庵は、芝居の辰巳常磐町、しかも浮世をはなれ里、へ世辞で丸めて浮気でこねて、小町様の詠めに飽かぬ、きやつにうっかり眉毛を読まれ、へほうし／＼はきつ／＼の、素見ぞめきで帰らりよか、わしはひょうたん浮く身じゃけれど、へ主は鯨のとどころ、ぬらりくらりと今日もまた、浮かれ浮かれて来たりける。
へもしやと簾をよそながら、喜撰の花香茶の給仕、へ波立つ胸を押し撫でて、しまりなけれど鉢巻も、幾度締めて水馴棒、へ濡れてみたさと手を取って、小野の夕立えにしの時雨、へ化粧の窓に手を組んで、どう見直して胴ふるい、へ今日の御見の初昔、悪性と聞いてこの胸が、臍の月や松の影、クドキへ私やお前の政所、いつか果報も一森と、褒められたさの身の願ひ、へ惚れすぎるほど愚痴な氣に、へ心の底の知れかねて、へじれたいでは、へないかいな(中略)へ粋といわれて浮いた同士、チヨボクレへやれ、色の世界に出家をとける、やれ／＼こまかにちよぼくれ、へ愚僧が住家は、京の辰巳の、世を宇治山とや、人はいうなり、へちや／＼くちやえんの話す濃い茶の、縁の橋姫、へ夕べの口舌の袖の移り香、花橋の小島が崎より、一散走りに走って戻れば、へ内の婢あが怪気の角文字、牛もよだれを、へ流るる川瀬の、へ内へ戻ってわれから焦がるる、螢を集めて手管の学問、へ唐も大和も、里の恋路か、山吹流しの水に照り添う、朝日のお山に誰でも彼でも、二世の契りは平等院とや、さりととはこれほうるさいこんだに、ほうい、へ掃命頂来どら如來(中略)ここに極まる楽しさよ、へ難波江の、片葉の芦の結ばれかかり、へよいやき、へこれわいな、へ解けてほぐれて逢うことも、待つに甲斐ある、やんれ夏の雨、へやあとこせ、へよいやき、へありや／＼、へこれわいな、へこのなんでもせえ、(中略)

ずや、然るに、晴明が勘文にしたがい、あら気づまりの物忌やな。
へかかるところへ、津の国の渡辺の里よりも、訪ねて伯母のきたしぐれ、へ江葉の笠も名にめでて、錦をかざすふるさとの、孝の力や杖つき乃の字の姿をも、うしとはいわで牽かれる、綱が館に着きにけり。へ門の外にたたずみて、いかに綱、津の国の伯母がはるばる参りたり。この門開き候え、疾く開けめされい。へ内には綱の声高く、はるばるとの御出なれど、仔細あつて物忌なれば、門の内へはかなわす候。へなに、門の内へはかなわぬと。へ是非に及ばず候。へあら曲もなき御事や。和殿が幼なきその時は、みづから抱き育てつつ、九夏三伏の暑き日は、扇の風にて涼がせつ、玄冬素雪の寒き夜は、ふすまを重ねあためて、和殿を綱といわせしこと、ああ皆みづからが思ならずや、恩を知らぬは人ならず。ええ汝は邪慳者かなと、声をあげてぞ泣き給う。へさしにも猛き渡辺も、あくまで伯母に口説かれて、是非なく門をおし開き、奥の一間に請じける。
へ伯母を敬い頭を下げ、さても只今は不思議の失礼仕って候、まず御酒一献きこし召し、その後御曲舞を所望申し候。へめでたき折なれば、舞おうするに候、へ御酒の機嫌をかりそめに、差す手引く手の末広や、へあら面白山廻り、二上りへまず筑紫には彦の山、讃岐に松山降り積む雪の白峰、河内に葛城、名に大峰、丹波丹後の界なる。鬼住む山ときこえしは、名も恐ろしき雲の奥、舞の合方へなつかしや。
本調子へいやとよ綱、鬼神の腕を切りとられし武勇のほど、凡そ天下にかくれなし、してその腕はいづこに在りや。へすなわちこれに唐櫃の蓋うち開けて、伯母の前にぞ直しける。へそのとき伯母はかの腕を、ためつすがめつしげしげと、眺めながめていたりしが、次第しだいに面色変わり、かの腕を、取るよと見えしがたちまちに、鬼神となつて跳び上り、へ破風を蹴破り現われ出で、あたりを睨みし有様は、身の毛もよだつばかりなり、へいかに綱、我こそ茨木童子なり。わが腕を取り返さんそのために、これまで来ると知らざるや。へ綱は怒りて早速を踏み、斬らんとなすれども虚空にあり。へいかにかなして討ち取るべしと、思へど次第に黒雲おおい、鬼神の姿は消え失せければ、かの晴明が勘文に、背きしことの口惜しきよ。なお時を得て討ち取るべしと、勇みたつたる武勇のほど、へ感ぜぬ者こそなかりけれ。

へ姉さんおんじよかえ、島田金谷は川の間、旅籠はいつもお定まり、へお泊りならば泊らんせ、お風呂もどどん沸いている。障子もこの頃張り替えて、畳もこの頃替えてある、お寝間のお伽も負けにして、へわらじの紐に仇とけの、結んだ縁の一夜妻、へあんまり憎うもあるまいかへてもそうなるぞうだろ、そうである、住吉様の岸の姫松めでたさよ、(中略)へ来世は生を黒牡丹、己が庵へ帰り行く、わが里さして急ぎ行く。

七、長唄綱つな館やかた

明治二年、根岸の勘五郎といわれた十一代目軒屋六左衛門作曲、このもととなったのは、寛保元年(一七四一)七月江戸中村座上演の「兵四阿屋造」で、これを復活したものだが、歌詞はほとんどそのまま使っている。

この曲は「戻橋」の後日物語で、戻橋で鬼女の腕を切り落して帰った渡辺の綱は、このような悪鬼は七日以内にその腕を取り戻して来るといわれ、阿倍晴明のいいつけ通り、門戸をとぎしてひきこもっている。そこへ綱の故郷から伯母が尋ねて来て、強引に家の中へ入りこんでしまふ。そしてせひともその腕を見せてくれといひ、見ているうちに鬼女の正体をあらわし、腕をとりもどして虚空に消え去るという筋。

曲全体が劇的要素を持ち、筋がわかり易くできているので、流行している。なお、新古今演劇十種の「茨木」は同じ趣向の曲だが、これは明治十六年に三代目軒屋正治郎が作曲したもので、素ではあまり演奏されない。

へさるるほどに、渡辺の源次綱は、鬼神の腕を切り取りつつ、武勇を天下に輝やかせり。へさりながら、かかる悪鬼は七日のうちに、かならず仇をなすなりと、陰陽の博士、晴明が勘文にまかせつつ、へ綱は七日の物忌して、仁王経を誦誦なし、門戸を閉じてぞいたりける。へすでに東寺羅生門の、鬼神の腕を切り取りしこと、これひとえに、君の御威徳なら

第二部

一、河東節 助六すけろく所縁ゆかりの江戸えど桜ざくら(助六)

河東節は、今から凡そ二七十年前に江戸で生れ、その後今日まで江戸っ子が愛好して育てて来た浄瑠璃で、別に江戸節ともいわれている。

今日演奏される助六は、その江戸節の中でも、とくに代表作といわれる作品。歌舞伎十八番の「助六」の芝居で、助六が登場してくる場面が使われる。歌舞伎の「助六」ではじめてこの河東節が使われたのは、宝暦十一年(一七六一)のこと、天保三年(一八三二)に歌舞伎十八番の内と銘うたれたからは、市川家の助六に限って、この河東節が語られることになった。

助六実はず我五郎が、友切丸詮義のために廓に入り、意休を切つて刀を取り戻すという簡単なストーリーだが、豪華けんならしたる舞台装置とあてやかな衣裳のとり合せ、そして江戸っ子の代表助六の大活躍で、観客を魅了してきた。

その助六が舞台上に登場してくるとき、伴奏として正面の御簾内で語られる浄瑠璃がこの「助六」で、華やかな気分を盛り上げる大切な浄瑠璃となっている。

本調子へ春霞立てるやいずこ三好野の、山口三浦うらうらと、うら若草や初花に、和らぐ土手を誰がいうて、日本めでたき国の名の、豊原や吉原に、根こして植えし江戸桜、匂う夕べの風につれ、鐘は上野か浅草か、その名を伝う花川戸。

へ遠近人の呼子鳥、いなにはあらぬ逢う瀬より、ここを浮世の仲の町、よしや交せし越し方を、へ思い出見世や清掻の、音じめの撥に招かれて、それといわねど顔よ鳥、問夫の名取の草の花。

「思い染めたる五つ所、へ紋日待つ日のよすがさえ、子供が便り待合の、辻占茶屋に濡れてぬる、雨の袈輪の冴え返る。へこの鉢巻は過ぎし頃、ゆかりの筋の紫も、君が許しの色見えて、移り変らで常磐木の、松の刷毛先すき額。へ堤八町風誘う、目あての柳花の雪、傘に横りし山あいは、富士と筑波をかざし草、草に音せぬ塗り鼻緒。へ一つ印籠一つ前。三下りへせくなせきやるなサヨエ、浮世はナ車サヨエ本調子へ廻る日なみの約束に、籬へ立ちておとづれも、果ては口舌かありふれた、手管に落ちて睦言と、なりふり床し君ゆかし。へしんぞ、へ命を揚巻の、これ助六が前渡り、風情なりける次第なり。」

二、義太夫 傾城阿波の鳴門 — 巡礼歌の段 —

近松半二、八民平七らの合作で明和五年（一七六七）六月、大阪竹本座初演。近松門左衛門の「夕霧阿波の鳴渡」の改作というが、そのおもかげはほとんどない。夕霧伊左衛門の話に、玉木家（実は伊達家）のお家騒動、阿波の十郎兵衛の巷説をとり入れた十段に及ぶ時代物。しかし、初演以後は第八段の十郎兵衛内、通称「巡礼歌の段」がもつとも名高く、この段だけがくり返し上演されている。芝居でも通称を「どんどろ」といって、やはりこの場面だけが上演される。なお「どんどろ」とは「土井殿」の転化で、お弓、おつるの悲しい場面はあまりにもポピュラーである。

「故郷を、はるばるここに紀三井寺、花の都も近くなるらん。
「巡礼に御報謝」と、いともやさしき国訛、てもしおらしい順礼衆、
「どれどれ報謝進じよう」と、盆に精米の志。「あいあい、ありがとござります」と、いとも物腰から爪はずれ、可愛らしい娘の子、定めて連衆は親御たち、国はいずくと尋ねられ、「あい、国は阿波の徳島でござ

うと思うけれど、悲しい事は一人旅じゃで、どこの宿でも泊めてはくれず、野に寝たり、山に寝たり、人の軒の下に寝て、はたかれたり、怖い事や悲しい事、父様や母様と一緒にいたりや、こんな目には逢うまいものを、どこにどうしていやしやんすぞ、逢いたい事じゃ逢いたい」と、わつと泣き出す娘より、見る母親はたまりかね、「お公道理じゃ、可愛いやいじらしや」と、われを忘れて抱き付き、前後正体歎きしが、これほど親を慕う子を、何とこのまま去なさりよう、いっそ打ち明け名乗ろうか、いやいやそれではこの子も同じ罪、その時の悲しさを思い廻せば去なすが為と、
「段々の様子を聞き、我が身のように思われて、悲しいとも情ないともいうにいわれぬ事ながら、とかく命が物種、まめでさえいりや、また連れわれまいものでもない。これ、しつけぬ旅に身をいたため、煩らいでも出りや悪い。どこをしようどに尋ねうより、その婆様の方へ去んでいろとの、おつけ父様や母様が、逢いに行てじゃほどに、悪い事はいわぬ、思い直してこれからすぐに国へ往んで、ずいぶんまで親たちの尋ねて行かしやるを待っているがよいぞや」と、なだめすかすをききかけて、「あいあい、忝のうござります。お前がそのように泣いて下さりませよ」と、いとも物腰から爪はずれ、可愛らしい娘の子、定めて連衆は親御たち、国はいずくと尋ねられ、「あい、国は阿波の徳島でござ

「これ、何ば一人旅でも、たんと銭さえやりや泊める。わずかなれども志し、この銭を路銀にして、早う国へ去にや、必ずかならず煩ろうてばしたもんな」と、銭を渡せば押し戻し、
「嬉しゅうござんすれど、銭は小判というものを、たんと持っております。そんなりやもうござんす。忝うござります」と、泣く泣く立つてひきとどめ、
「それはそれでもこれはわしが志し」と、無理に持たして塵打ち払い、

「むむ、何じゃ徳島、さつてもそれは、まあなつかしい、わしが生れも阿波の徳島、そして父様や母様と一緒に巡礼さんすのか。」「いえいえ、その父様や母様に逢いたさ故、それでわし一人西国するのでござります」と、聞いてどうやら気にかかる。お弓はなおもそばに寄り、「む、父様や母様に逢いたさに西国するとは、どうした訳じゃ、それが聞きたい。まあその親たちの名は何というぞいの。」「あい、どうした訳じゃ知らぬが、三つの年に父様も母様も、わしを婆様に預けて、どこへやらいかしやんしたげな。それでわたしは、婆様の世話になっていたけれど、どうぞ父様や母様に逢いたい、顔が見たい、それで方々尋ねてあるくのでござります。父様の名は阿波の十郎兵衛、母様はお弓と申します」と、きいてびっくりお弓はとりつき、「これこれ、あの、父様は十郎兵衛、母様はお弓、三つ年別れて、婆様に育てられたとは、疑いもないわが娘」と、見れば見るほど幼な顔、見覚えのある額の黒子（ほくろ）やれ我が子かなつかしやと、いわんとせしがいや待てしばし、夫婦は今もとらるる命、元より覚悟の身なれども、親子といわばこの子にまで、どんな愛き目がかろうやら、それを思えばなま中に、名乗り立てして愛き目を見んより、名乗らでこのまま帰すのが、かえてこの子がためならんと、心を鎮めよそよそしく、「お、それはまあまあ、年々も行かぬにはるばるの所を、よう尋ねに出さしやつたのう、その親達も聞いたなら、さぞ嬉しゅう嬉しゅうて、飛び立つようにならうが、ままたらぬ世のうきふし、身にも命にもかえて、可愛い子をふり捨て、国を立ち退く親御の心、よくよくの事であろうほどに、むごい親と必ずかならず恨まぬがよいぞや。」「いえいえもつたない、何の恨みまじやう、恨むる事はないけれど、小さい時別れたれば、父様や母様の顔も覚えす。よその子供が、母様に髪結うて貰うたり、夜は抱かれて寝やしやんすを見ると、わしも母様があるなら、あのように髪結うて貰おうもの、うらやましゅうござんす。どうぞ早う尋ねて逢いたい、ひよつと逢われまいかと思えば、それが悲しゅうござんす」と、泣いじやくりするいじらしさ。母は心も消え入る思い。「さてもさても世の中に、親となり子と生るるほど、深い縁はなれども、親が死んだり子が先立ったり、思うようにならぬが浮世、こなたもどれほど尋ねても、顔も所も知らぬ親たち、逢われぬときは詮ない事、もう尋ねず国へ往んだがよいわいの。」「いえいえ恋しい父様や母様、たとえいつまでかかかってなど、尋ね

「これもう去にやるか、名残が惜しい、別れとむない。これ今一度顔を」と引き寄せて、見れば見るほど胸せまり、離れがたなき愛き思い。それと知らねどまことの血筋、名残惜しげに振り返り、どこをどうして尋ねたら、父様や母様に逢われることぞ、逢わしてたべ南無大悲の観音様、へ父母の、恵みも深き紛川寺、仏の誓い頼もしきかな、泣く泣く別れ行く跡を、見送り見送り延び上り、「これ娘、ま一度こちら向いてたも、せつかく長の海山越え、艱難してあこがれ尋ねるいとし子に、不思議と逢いは逢いながら、名乗らで去なす母が気は、どのようにあろうと思つ、狂気半分半分は死んでるわいの、まだ長生きのある子をば、親故路頭に立たすか」と、そのままそこにと伏し、消え入るばかり嘆きしが、起き直つて涙を押さえ、「イヤイヤどう思い諦めても、今別れてはまた逢うことはならぬ身の上、たとえ難儀がからばかかれ、またその時は夫の思案、程は行くまい追いついて、つれて戻ろう、そうじゃそうじゃ」と子に迷う、道は親子のわかれ道、跡を慕うて、尋ね行く。

三、新内節 日高川 — 清姫嫉妬の段 — (上)

紀州道成寺に伝わる安珍清姫の物語は、いわゆる「道成寺もの」として、早くから能、人形浄瑠璃、歌舞伎舞踊、歌謡などにとりあげられてきた。新内のこの曲もその一つで、変化もあり、曲もよくできているので、昔から流行している。寛保二年（一七四二）八月、大阪豊竹座で「道成寺現在蛇鱗」が上演された、浅田一鳥と並木宗輔の合作。五段物で、当時流行の歌舞伎の道成寺に刺激されて作られたという。その第四段の景事「清姫日高川の段」の前半を、鶴賀若狭掾が新内にしたものとわかれていた。
光仁天皇の病気を機に、他戸皇子を推す藤原百川と、山部親王を推す和氣浜成が対立して争う。そのお家騒動の中で、紀州真子の庄司の娘清姫は、藤原百川の子安珍を恋慕うよ

うになる。ところが安珍は橘道成の娘錦の前と許嫁の間である。いろいろあって、安珍が錦の前との再会を喜ぶ場面を見てもしまった清姫は、嫉妬のあまり逆上して泣き叫ぶ。兄の新左衛門は安珍を道成寺へ逃がす。安珍がいなくなったのを知った清姫は、そのあとを追う。これからは景事になるという段取り。しかしこれは清姫の見た夢であり、やがて清姫は錦の前の身代わりにおざと斬られて死ぬ。他戸皇子は捕えられて佐渡へ流される。

新内節では独立した演目なので、話しの筋はわかりやすい。上下二段にわけられ、上は俗に「堤」、下は「飛び込み」という。時間の都合で今日は上の部を演奏する。嫉妬に狂った清姫が日高川に着くまで。

「行く空の、姿しどなき振袖の、うら吹き返す夜風の、身にしむ野辺の露深き、草踏み分けてただ一人(中略)走りつまずく小石原、へ向こうへちよこちよこ小提灯、さげた男の急ぎ足、間近くなれば声をかけ、へ申し、ちよもの問いましよう、二十歳ばかりの山伏姿、器量のよいが先へ行かずや、お逢いなされはせなんだかと、へいわれたおやじは、おおなるほど、逢うた、逢うたわいの、それはよっぽどあのこと、宵闇で道筋が知れにくい、道成寺へはこう行くかと、問われた時の顔付、うろくきよろ、それを尋ねるこなたの素振り、うむ聞えた、こりやまあてつきり色じやの、おつこちじやあの、へしかもつばみの花の色、うつりにけりないたずらも、いやも添うに添われぬ訳あつて、いつそひと思いに死んでしまい、未来で添うなどと思わしやろうが、そりやあ大きな無分別、これまでその手がいくらもあれど、先で逢うやら逢わぬやら、どうやらこうやら便宜がない事に、かの山伏殿にはの、へたんと道が遅れたかえ、へいやも遅れたの段じやあない、なんぼせいでても女子の足、追いつく間には夜が明きよう、引き返して去んだがよかる、おららも宿へ帰らんと、足もしどろに行き過ぎる。

へああ遅れたり口惜しや、いで追いつかんと気をいらち、小棲引き上げ帯引き締め(中略)行く先に、へ刀の鞘に、状箱かたげた早飛脚、行き当って、あいたちこ、鼻柱ががんとした、これ目をあいて通りやいと、叱り散らして行き過ぎるを、へこれ待ってと引き留め、ちの銭などを当て、柳の下からヒュードドロ、あら恨めしや聞浮恋しやなぞというて出るものじやが、ああいとしや、そのようなうっかりでは、極楽浄土の道も知れまいて、どりや、この坊さんが商売のお念仏で、十万億土へやつてくりよう、なまいだなまいだ、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、へあのこれこれ、私やそのような者じやござんせぬ、先へ行た人に追いつかねばならぬ者、どこもとで逢わしやんしたか、それが聞きたい、さ、ちやつと、へあれまためつそつもない、なり格好もいらいで、おお合点々々、それなれば後の松原で逢うた、かの山伏の事でもあろうかい、その和郎がいうたにはの、この道筋を若い女子が来たならば、俺はこの日高の川へ身を投げて死んだというて、だまして後へ帰してくれ、逢うてはきつう難儀をするゆえ、これ御出家様え、どうぞ頼む頼むといわしやつたけれど、愚僧の耳には卯々と聞えたなれども、愚僧は嘘つく事が大嫌い、なあ嘘をつくと未来へ行て、赤い鬼や青い鬼、黄色い鬼、白い鬼や黒い鬼、おうち紋りやたら縞焦げ茶、色々々な鬼が出て責めるげな、それが怖さにま真つすぐにいますぞや、ああこれこれ、それいうたでその血相はなんの事じやい、のう怖や恐ろしや、おららが知つた事じやないわい、知らぬが仏なんまいだ、へ許し給えや御女中、助け給えや御誓願、なんまいだ、へ、仏徒も方法は逃げ足は、行き方知れずになりけり。

四、常磐津 忍 奇 恋 曲 者 (将 門)

常磐津の代表曲。天保七年(一八三六)七月、江戸市村座初演。宝田寿助作詞、四世岸沢式佐作曲。

と尋ねたい事がある、二十歳ばかりの山伏の、へおつとととと、皆まで聞くには及ばぬ、それはたつた今、後で逢うたが、その山伏の話しに、へどういうたえ、へいやも、鼻柱ががんとした、へはてじやらじやらと転合いわすと、ありようにいいて下さんせ、へさあさあ、ありようとは定めしこなはんの事でもあろうかい、ええもしも後から十六七の娘が来たならば、かならず俺に逢うた事、いいてくれなと頼みやつての、へしてその後はえ、へいやも、それいいてる隙がないわい、へのもあつても、問わにやならぬ、訊聞いて追いつきたい、さ、ちやつと行きたいわいな、へいやも、そつちよりこつちが、おつちやちやのちやつと行きたい、急用じや、さささ、そこをのいたのいた、へいや、聞かねばなんぼでも通さぬ通さぬ、へやなんじやと、聞かねばなんぼでも通さぬ通さぬ、はてさて邪魔な女郎に出逢うたわい、時が切りようか知らねども、ちよっぴりとかいつまんで話さざるまいかい、たかがこうだとその方を放つておいて、夜ぬけするといつたよ、へちい、してまたなんといつたえ、へさつてもくどし問い殺すは、これから後は大事の話、とつくりといわねばならぬ、姉さんここへ耳を持ってござんせ、へこうでござんすかえ、へうむ、そうじや、その後はのう、へその後は、へその後は、あのものの、みみつととと、びつくりする間にすりぬけて、飛ぶが如く走り行く。

へ清姫かつとせきのほせ、さてこそわれを出し抜いて、錦の前に添わんため、逃げ隠るるは汚なし僧し、命限り根限り、追いかけて追いつめんに、思いを知らせんと、せけばせくほど足もとは、ならわぬ道に疲るるを、踏みしめ、へ行く先に、へ鐘打ちならしひよこひよこ、無縁法界七墓を、毎夜巡る修業者が、行き違ひさま、へこれ坊さん、ちと頼みたい事があると、声かけられてわつと飛びのき、よよよよ寄るまいぞ寄るまいぞ、どうやら今夜はきぶつさいな晩じやと思つたら、案の条出たほどに、出られましたほどにのう、へああこれこれ苦しゅうない者じやわいの、へいやも、そちらが苦しゅうのうても、こちらが苦ししいわい、この夜更けに坊主を見かけて頼みたいなどいやるからは、おおかた家札が戸守でもめくつてくれいという事でもあろうがな、それこころは原中、家は一軒もないぞよ、近頃粗相千番な幽霊じやの、見ればびらりしやらり、しやらりびらりと、色よい着る物を着て、こころ、そつちの幽霊なぞというものは、当り前は白無垢を着て、額にこう三角

源頼信の命を受けた大宅太郎光圀が、平将門の余類詮議のため、相馬の古御所に忍び込む。とそこへ将門の娘の滝夜叉姫が、島原の傾城如月(きさらぎ)となつてあらわれ、妖術でもつて色仕掛で味方に引き入れようとする。光圀はこれを見あらわし、立回りとなるという筋。

何といつても常磐津節の代名詞のようになってる滝夜叉のクドキ「嗟峨や御室」が有名で、情緒あふれる趣きがある。しかしそのあとの「へさても相馬の」の物語り、「ほのぼのと」の廓話、「一つ一夜の」の踊り地と、まことに変化に富んだ美しいメロデーが続いてあきさせない。今日は時間の都合で、一部分を省略して演奏いたします。

へそれ五行子にありという、かの紹興の十四年、楽平泉なる陽泉の、昔をここに湖の、水気盛んに浩々と、澄めるは昇る天津空、雨もしきりと古御所に、解語の花の立ち姿。三下りへ恋はくせもの世の人の、迷いの淵瀬きのどくの、山より落つる流れの身、うさねの琴のそれならで、へ妻呼び交す雁金の、その玉章をかくばかり、色に手だれの傾城も、焦がるる人に逢い見ての、後の思いにくらぶ山、忍ぶ涙の春雨を、傘にしので来りける。へ大宅の太郎は目をさまし、将門山の古御所に、妖怪変化すみかを求め人倫を悩ます由、頼信公の仰せをうけし光圀が、しばしまどろむそのうちに、見なれぬ座敷のこのていは、正しく変化の所為なるか。へ申し申し光圀さま。へさてこそ変化ござんなれ。いで正体をと、立ち寄る光圀、女はあわて押しとどめ。へああ申し、様子いわねばお前の疑い、私や都の島原で、如月という傾城でござんすわいなあ。へやあ、心得難きその一言、波濤を隔てしこの国へ、傾城遊女の身をもつて、来り住むべきいわれなし。よしまた都の遊女にせよ、ついに見もせぬその方が、何ゆえ我をと不審の言葉。へさあお尋ねなくともお前の胸、暗らすは過ぎし春の頃、へ何と、へ申し。へ嗟峨や御室の花盛り、浮気な蝶も色かせく、廓の者に連れられて、外

珍らしき嵐山、へそれ覚えてか君様の、袴も春の臙染め、臙気ならぬ殿
ぶりを、へ見染めて染めて恥かしの、森の下露思は胸に、へ光圀様と
いうことは、その折知って明暮に、女子の念が今日の今、届いて嬉しい
この逢う瀬、疑い晴らして下さんせ、やいのやいのと取り纏り、赤らむ
顔の袖屏風。光圀わざとうちとけて、

へいかさま切なるおことが心底、さほどに思う愛情を、捨つるはかえつ
て本意ならず、疑念はさっぱり晴れたれども、武辺修業のわが身の上、
望みを果さばとおかくも、それにつけてもいにしへの、東内裏の莊殿を、
思い出せば、とおおそれよ。

へさて相馬の将門は、へ威勢のあまり謀叛とともに、企て並べし大内
裏、驕者のふるまい都に聞こえ、朝敵討手の三大将、頃は二月の百千鳥
まっさきかけて押し寄する。数度の戦さも辛島に、集まり勢の悲しさは、
風に残んの雪なだれ、むらむらばつと吹き散つたり。平親王が最後の
一戦、見よや見よやと夕月の、鹿毛なる駒に打ち乗って、向う者をば
打ち、立ち割り、ほろ付け、車斬り。かくと見るより上平太が、放つ矢
先に将門は、こめかみ筒深に射通され、馬よりどうとあえなき落命。寄
せ手は勇む勝鬨と、今見る如く物語る。

へ思えば無念と如月が、齒を喰いしはる忍び泣き、さこそと光圀詰め寄
つて、へ合点の行かぬ女がふるまい、今合戦の様子を聞き、しきりに催
す落涙はと、見とがめられてそらさぬ顔。へほほほ……、何の私が泣く
もので、泣いたというは、おおそれそれ、可愛い男に別れの鶏鐘、後朝
告ぐる朝雀、雀が泣いたということいなあ。

へほのほのと、雀囀る奥座敷、燈火しめす男ども、へ屏風一重のそなた
には、まだ睦言の聞こゆれど、へ我は見足らぬ夢を裂き、はや後朝と引
き締める。へ帯隠さるる戯れも、へ憎うはあらぬ移り香に、また盃の数
ふれて、三の切れたる三味線も、弾かるほどは弾いて見ん、仇し心の
仇枕。へ交さぬ先もあるものを、去なば去なんせよしやただ、ひとり浮
き身を数え唄、廓の水管に紛らかす、はずみに落せし錦の御旗。へこり
やこれ、たしかに、へいやそれは、へそれとは、へそれ、へそれそれそ
れ、そつこでせい。

へ一つ一夜の契りさえ、二つ枕の許しなき、三つ三重四重まわり気は、
いつまで解かぬ常陸帯、六つ酷いと思いはせいで、七つの鐘も恨めしや
なまめかし。

へ残るくまなくさわりなく、光りかがやく朝日かけ、加茂の川風のどか
なる、都の春になりぬれば、野山の草木おしなへて、合、花咲きにけり、
白妙の富士の高嶺もみちのくの積りし雪の名残りなる、合、とけて流る
る川水も、行末広き浪花渦、波路のどけき四方の海、寄せくる船のうち
集い、合、めぐみも深き大君の、豊かなる世にたちかへり、万代歌ふ声
ぞ絶えせぬ、よろずよ歌ふ声ぞ絶えせぬ。

六、清元忍逢春雪解(三千歳)

河竹黙阿弥作詞、二世清元梅吉作曲。明治十四年三月、東
京新富座上演の世話狂言「天衣紛上野初花」(くもにまごう
うえのはつはな)の第六幕「大口寮座敷の場」に出した狂
言浄るり。

悪事がばれて、高飛びしようとする片岡直次郎(直侍)が、
入谷の寮にいる三千歳に最後の別れを惜しんで忍んでくる。
その色模様に使ったもの。

へ冴え返る、春の寒さに降る雨も、暮れていつしか雪となり、上野の鐘
の音も凍る、細き流れの幾曲り、末は田川へ入谷村。へ廓へ近き畦道も、
右か左か白妙に、行き来のなきを幸いと、人目を忍びたたずみて、
直次郎へ思いがけなく文質に出会い、頼んでやっさき手紙、もう
三千歳の手へ届いた時分、門の締りがあけてあるか、そつと門からあ
たつてみようか。

へたしかにここと見覚えの、門のとぼそへ立ち寄れば、風に鳴子の音高
く、おどろく折から新造が、灯したずさえ立ち出でて、
千代春へ今、鳴子の鳴ったのは、風のようにではなかったが、
千代鶴へ大方ここに直はんが、

へさてこそさてこそ、相馬錦のこの旗を、所持なすからは問うに及ばず、
将門が忘れ形見、滝夜叉であるうが。

へいいや知らぬ、覚えはないぞ。

へやあ、覚えなるとは卑怯の一言、肉芝仙より伝わりし、蝦蟇の妖術習
い覚え、この古御所に隠れ棲むこと、叔聞に達せし上は、もはや逃れぬ
おことが身の上、本名名乗って降参なせ。

へちええ残念や、口惜しや、かくなる上は何をか包まん、まこと我こそ
平親王将門が娘滝夜叉なるわ。

へさてこそな。

へ一器量ある汝ゆえ、命を助け味方にと、思う心が仇となり、見現わさ
れし上からは、習い覚えし妖術にて、光圀そちが命を絶つ、覚悟なせ。

へ何を小癩な。

へ怒れる面色たちまちに、柳眉逆立ち吐く息は、炎となって滔々たる、
妖術魔術の業通に、さすがの勇者もたじたじ、梢木の葉のさらさら
さら、魔風とともに光圀が、襟髪つかんで宙宇の争い、怪し恐ろし世に
うとう、時を絵本の忠義伝、歌舞伎に残す物語、拙き筆に書き納む。

五、三曲都の春

山田流は江戸時代に歌を主とした箏曲として発達した流儀
で、今日でも歌曲本位ですが、この「都の春」は、歌曲でも
手事風に近いものとしてできた曲です。三世山勢松韻が、東
京音楽学校(現芸大)教授時代(明治二十三年)に作った曲
で、音楽学校奏楽堂の開場式にこの新作を発表、演奏したも
のです。

都といっても東京ではなく、京阪の春をたたえた歌で、作
歌は先代の鍋島家の姫君。曲の構成は、初めに長い前奏があ
り、独吟から前唄、そこに手事があり、本調子そのものが二
上りで納まるという華やかな曲で、三味線に台広駒を使っ
てる点も、山田流としては変わったところですよ。

千代春へああもし、静かにしましよ。

へさし足なして千代春が、とぼそへ寄りて声ひそめ、

千代春へ直はんさまですか。

直次郎へそういう声は千代春さんかえ。

千代春へ早くこつちへ入んなましよ。

へ気転きかして奥と口、互いに心合鍵に、とぼそを開けて伴う折から、
門の外には丑松が、内の様子をうかがいて、一人うなずき雪道を、飛ぶ
が如くに急ぎ行く。へはれて逢われぬ恋仲は、人に心を奥の間より、知
らせ嬉しく三千歳が、飛び立つばかり立ち出でて、わけも涙にすがりつ
き、

千代春へおいらん、

千代鶴へ直はん、

千代春へこいでゆつくり、

二人へお嘶しなんしえ。

へ廓になれたる新造が、話の邪魔と次の間へ、粹を通して入りにける。
へあとには二人差し合ひも、涙ぬぐうて三千歳が、恨めしそくに顔を見
て、

三千歳へわずか別れていてさえも、

へ一日逢わねば千日の、思いに私や患うて、針や薬のしるしさえ、泣き
の涙に紙濡らし、枕に結ぶ夢さめて、いとど思いのます鏡、へ見るたび
ごとに面やせて、どうで長らえいらねば、殺して行って下んせと、男
にすがりなげくにぞ。

直次郎へ今さらいつて返らぬが、悪事をなしてお仕置を、受ければ先祖
代々の、墓へ入れぬこの身の上、回向院の下郎へ、おれの墓を建てて
くれ、これがおぬしへおれの頼みだ。

へこれが頼みと手を取りて、ともに涙に暮れにける。へ男も愚痴にから
まれて、もてあましたる折からに、始終をきいて寮番の、喜兵衛は一問
を立ち出でて、

喜兵衛へことううちにも寸善尺魔、さわりのないうち早くお逃げなさ
れませ、さあさあ、

へげに桓山の悲しみも、かくやとばかり降る雪に、積る思いぞ残しける。

七、長唄 鞆

うづは ざる

明治二年、二世杵屋勝三郎作曲。原拠は狂言の「うづは猿」。歌舞伎の舞台で上演されるのは常磐津の「花舞台霞の猿」で、こちらもとは同じ、しかし常磐津のほうは歌舞伎らしく女大名と奴になっていて、華やかに話しが展開する。それに対してこちらの長唄は、同じ狂言種ながら、そういう派手さはなく、狂言に近い構成で、かえって上品さを出している。大名が春野の狩りの帰りに、子猿を連れだ猿曳きに出あう。大名はその子猿を矢入れの鞆にと所望する。猿曳きの愁嘆があり、やむなくただ一撃に鞆を振り上げるが、子猿は殺されることも知らず船を漕ぐ真似をする。それを見て大名も哀れに思い、子猿の命を助ける。猿曳きはお札に猿を舞わせるという筋。

なおこの曲は、二世杵屋勝三郎がかねて鼻唄になっていた、浅草蔵前の酒問屋の主人に頼まれて作ったものといわれている。

本調子へそれ弓矢の始まりは、神代の時より用いしとかや聞きつらん、矢入れを鞆と名付けしは、その中うつろにして、外に毛皮をかけたるは、栗の穂なぞに似たればとて、空穂とはいひ伝う。

へあら不思議やな、怪石裂けて石卵生じ、たちまち化して猿となることは、人を教えのたとえ草、へ秋吹く風に笛の音は、草刈る童子もいづくかと、たよりし先はそれならで、妻を恋しと鹿笛に、隔てられたる谷川へ、散りし紅葉も時雨に濡れて、とけて嬉しき雪の暮、面白や。

二上りへはや新玉の春ぞ来る、ぞめき離せし花の中、花のむしろに弾く三味線の、その糸桜いといなく、殿も家来もほのめく顔の、よい緋桜の向島、土手の錦も花の空、竹屋々と呼ぶ船に、乗り合わしたる猿回し、こなたの岸へと着きにけり。

本調子へ太郎冠者あるか、へはあ御前に候、へあれに背負うた一物を、いづくへ伴うなるか、尋ねて参り候えと、へ仰せに冠者は心得て、のう

のう猿曳止れとこそ、その猿いづくへ曳き候や、といひければ、賤の男ははあつと手をつかえ、やつがれはこのあたりに住む猿曳にて候が、今日もお旦那回りを、いたそうと存じまする、心急げばやつがれは、そろりそろりと参ろうか、へやれ待とうぞ猿曳、この方は隠れもない大名でおりやる、今日は春野の遊びにて、弓矢をかたげ、狩りに参つたが、あれに持たせたる、鞆をないない毛皮にしようと思ふ折から、よい猿に逢うた、その猿の皮を申し受けたしと、へ聞いて驚く猿曳が、猿の皮をお好みとな、そもやそも、生きているものの皮が、何とてあげらるるでござらうぞ、この猿を持ちまして、一日一日の命を送ります、これをあげましては、明日より何の手業なし、こればかりはお許し、へと詫るに聞かぬ大名の、威をはりつめし強弓の、一と矢に射とたちかかると、へああもし待ってくだざりませ、猿の皮が御用ならば、御手をおろし射殺されましては、皮に疵がつき、ここに猿の一撃と申しまして、一撃にて命の失せるところがござるによつて、殺して進ぜましよう。へ太郎冠者も心得、早うくと勧めけり、へまたあるまじき殿の御意、番類なれどもよう聞けよ、子猿の時より飼育て、今さら憂き目を見ることはふびんなことぞ、今撃つほどに、草葉の蔭にても、恨みと思つてくるるなよ、あれ是非なしと振上ぐる鞆の下、回る子猿のいじらしき、へあれ／＼今の御覧なされたか、撃ち殺さるる鞆とは知らいで、船漕ぐ真似をしますぞ、へなに殺さるると知らいで、芸をするとはふびんなことぞ、やい太郎冠者、撃つなといえ、撃つなといえ、連れて帰れと申せい、へと聞いて喜ぶ猿曳が、ただありがたしと伏し拝み、この上の御札に、猿にいと舞まわせましよう、声張り上げ、二上りへえい、猿が参つてこなたの御知行、まさるめでたき能つかまつる、へ猿は山王まさるめでたきめでたさよ、天より宝が降りくだつて増生すれば、綾や千反錦や千反、唐織物よ、地には黄金の花が咲き候、げに豊かなる時なれや、へげに豊かなる時なれや、へさらば我らはお暇と、もと来し道へ帰らんと、花を見捨てて帰る雁、空も高根の富士筑波、名に負う隅田の春の夕、景色をここにとどめけり、景色をここにとどめけり。

御 礼 邦 楽 連 合 会

本日はようこそお出かけ下さりまして、ありがとうございます。何かと不行届の点もありますが、お許しを願ひまして、どうぞごゆっくりとお楽しみ下さいますよう、お願い申し上げます。

今までには、このようにしてまとまって鑑賞していただく機会は、少なかつたように思います。その少ない機会を大切にしよう、出演者も一生懸命でございます。これからもどうぞ続けて邦楽に変わぬ御支援をいただけますようお願い申し上げます。

来年も三月六日(日)に、このホールでの演奏会を予定しております。番組がきまりましたら御案内をお送りいたしますので、はさみ込みのアンケート用紙に、おところ、お名前をお書き込みの上、受付にお渡し下さいますよう、お願い申し上げます。また、今日おき下さりました御感想や御意見などもお寄せ下さいまして、よりよい邦楽のために御指導を賜りますよう、合わせてお願いを申し上げます。

ありがとうございます。